

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第22回】

宇高雄志

(兵庫県立大学准教授)

ペナンとマラッカが世界遺産に 多様な文化をまもること

2008年マラッカとペナンが、ユネスコの世界文化遺産となった。マレーシアで初の世界文化遺産登録となって同国でも歓迎された。しかし登録までの道は平坦ではなかった。

「二級」遺産と真正性

10年ほど前、ペナンをある文化財の専門家と歩いていたとき、彼は「移民社会の二級の遺産しかみあたらないな」ともらした。確かにマレーシアは多民族社会。それぞれの民族が中国やインド、もしくは英国などの旧宗主国からもちこんだ文化による遺産が多い。

遺産保全では「真正性:オーセンティシティー」が重視され物件が「本物」であることが大切だ。しかしマレーシアは文化的な多様性の歴史的背景の下、独特の文化を育んできた。それをどのように評価するかが問われるわけだ。

すでに1990年代の前半には、たとえばペナンの中心市街地にある、モスクや廟、教会、寺院が隣接している様に着目して、多民族の共存こそが、物件の建造物としての「本物」度にして大切だという指摘もあった。ただそれへの世論の支持は低調だった。ましてマレー系の文化はカンボンにありこそすれ、都市には表れない。遺産保全の議論に関心を示す人に中国系が多いこともあってか「チャイニーズマターだ」と切り捨てる識者も少なくなかった。

多元性のユニークさ

それが徐々にその多元性に関心を持つ人が現れ始めた。

世界遺産の登録に先立って対象地区の主な歴史的物件の背景や重要度を表す書面をそろえる必要がある。これまでは個々の物件が中国のインドのどの文化財に近似しているかが強調されていたと思う。し

かし2002年ごろから、それぞれの物件がほかの民族や信仰の物件とどのような関係にあったのか。またマレー半島や東南アジア社会の中での位置づけが注目されるようになる。多元性はマレーシア社会のユニークさを表すのだと。これには2001年の米国での同時多発テロによる「イスラム国」への国際社会のまなざしの変化を指摘する人もある。

またマレー、中国、インドといったいわゆる「主要三民族」の記述だけではなく、より人口規模の小さい民族集団もマレーシアの多様性を構成するものと位置づけられた。

ただ、これが世界遺産となるかどうかは未知数だった。関係者の雰囲気としてもそれは「当選確実」といったものではなかった。実際に登録推進の過程でも幾度も世界遺産登録がみあわされた。関係者の間では半ばあきらめムードもあった。

世界の遺産の地域の価値付け

それがついに2008年に世界遺産に登録される。登録には無論、国際政治の作用する領域もあろう。

ペナンやマラッカの都市のありさまが国内から、世界から認識をされたということは、世界の遺産に対するまなざしの変化があるのではないかと思う。実際に世界遺産の登録基準も時を追って「進化」してきた。今回の登録は、世界が、マレーシア社会のユニークさを、価値付けできるかどうかへの回答なのかもしれない。

【プロフィール】

1969年兵庫県生まれ。京都大学大学院工学研究科修了。博士(工学)。マレーシア科学大学(USM)に研究員として所属した。マレーシアの都市と建築について研究をしているほか、歴史的な建造物の保全に携わる。主な著書に『住まいと暮らしからみる多民族社会マレーシア(南船北馬舎)』